

「胃外科」

「胃外科研究会」 編集

新潟大学学長 武藤 輝一

東京慈恵会医科大学教授 青木 照明

大阪医科大学教授 岡島 邦雄 責任編集

慶応義塾大学教授 北島 政樹

横浜市立大学助教授・浦舟病院救命救急センター長 杉山 貢

近畿大学教授・第1外科

安 富 正 幸

わが国では外科医の大部分は消化器外科に関係し、その中でも最も多いのが胃の外科である。その意味で胃外科は消化器外科の中心であり、基本だと言うことができる。日本の胃外科は国際的に見ても最も進んだ外科である。まさに胃外科に引っ張られて日本の消化器外科が発達してきたのである。このように胃外科が進歩した理由はわが国では胃外科の対象となる疾患、特に胃癌が多かったからであるが、胃外科の先達のたゆみない研鑽と、それを引き継いだ現在の指導者の研究の賜物であろう。これらの指導者の執筆による胃外科が上梓された。本書は胃外科の指導者による集大成である。

胃外科の中心である胃癌は、診断・治療の進歩により根治率が著しく高くなり生存率が改善したが、依然として癌死亡の第1位である。また胃潰瘍は薬物療法の進歩により手術数は減少したにもかかわらず、穿孔・狭窄など最も重要な外科的疾患の1つである。胃癌の手術は消化器のみならず癌外科の基本であり、胃

癌の外科の考え方や手技が癌外科全般の発展をもたらしてきた。したがって胃癌外科の歴史や手技を習得することから消化器外科ひいては外科一般の手術を理解することができる。

本書では胃外科の歴史や変遷から始まる。ここでは胃の切除範囲、胃切除後の吻合法の歴史が興味深く書かれている。また、外科手術から見た胃の解剖や生理は普通の教科書にはないおもしろさがあるし、胃切除後の残胃の生理機能は胃外科を専攻する者にとって必須の内容で、興味深く書かれている。診断法では形態的診断としてX線診断、内視鏡診断、生検の組織診断が、機能的な診断法は消化酵素から胃酸分泌、更にはその検査法・手技まで解説されている。手術の実際については急性粘膜病変から吻合部潰瘍、特殊な潰瘍、胃癌、更には特殊な病変を取り上げ、これらの手術法と手術成績について最新の成果が書かれている。特に胃癌に関しては早期癌、進行癌、残胃の癌、再発癌に対する治療と最新の

治療成績が書かれている。内視鏡的手術や補助療法 of 知識も必須であり、この点も十分書き込まれている。特に、内視鏡的粘膜切除法や近年勢いよく進展している腹腔鏡下胃手術の具体的方法や考察が述べられている。

最後に胃外科にまつわるトピックスとして、遺伝子異常、*Helicobacter pylori*, interventional therapy, 胃癌手術とQOL, 癌告知などが取り上げられているが、胃外科を学ぶ者にとってはトピックスというより必須の知識である。本書の内容は単に現在のエキスパートにより執筆されたというよりも胃外科を知ろうとする者にとって必須の知識が盛り込まれている。外科系の臨床研修医から消化器外科の専門医まで消化器外科に関係する医師の必携の書である。

● B5 頁408 図302 写真28
カラー写真97 表80 1997
定価(本体22,000円+税) 円400

—医学書院 刊(☎03-3817-5657)